

SHOW-HIGH シネマルーム

★★★★★

殺しの分け前／ポイント・ブランク (Point Blank)

1967 年／アメリカ映画
配給：コピアポア・フィルム／92 分

2025 (令和 7) 年 7 月 19 日鑑賞

テアトル梅田



2025-64

監督：ジョン・ブアマン

原作：リチャード・スターク『悪党
パーカー／人狩り』

出演：リー・マーヴィン／アンジ
ー・ディキンソン／ジョン・
ヴァーノン／シャロン・アッ
カー／キーナン・ウィン／キ
ャロル・オコナー／ロイド・
ボックナー／マイケル・スト
ロング／ジェームズ・シッケ
ング／サンドラ・ワーナー

みどころ

1950 年代のアメリカ西部劇を代表するタフガイがジョン・ウェインなら、60 年代アメリカのタフガイを代表する性格俳優は誰？そこでリー・マーヴィンの名前を挙げる人は、私たち団塊世代より年上の人だけ。若い人はその名前すら聞いたことがないはずだ。

そんなハリウッド俳優が主演した“ハード・ボイルドの最高傑作”が、今なぜ大公開！『ポイント・ブランク』だけでは何の映画かわからないが、『殺しの分け前』という邦題を見れば本作のテーマは明らかだ。

もっとも、説明調を極力避け、セリフも最小限にした上で、次々とターゲットに向けての復讐を実行していく主人公が再三繰り返すセリフは、「俺の分け前を返せ！」だが、その分け前は How much？それを考えれば、約 50 年の歳月の流れを思い知るはずだが、他方、人間の欲はどんな時代でも同じ！？したがって、60 年代の“ハード・ボイルドの最高傑作”の“美学”も今と同じはずだ。そんな認識を本作でしっかりと！

■□■あなたは俳優リー・マーヴィンを知ってる？■□■

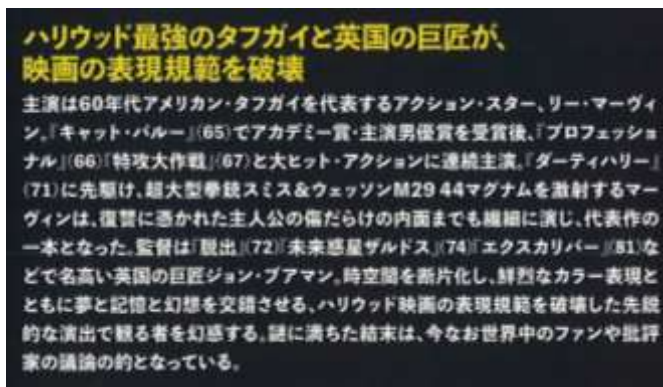
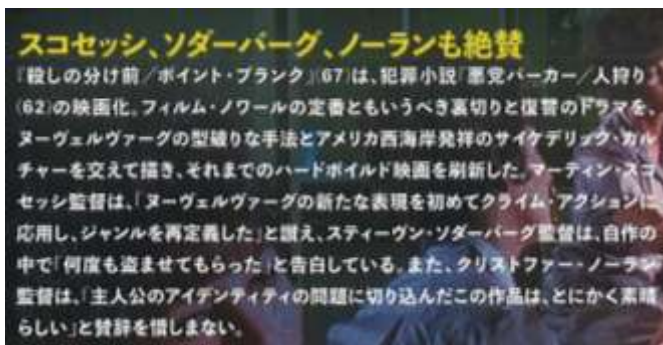
私たち団塊世代は誰でも、50 年代のアメリカの西部劇を代表するタフガイであるジョン・ウェインを知っているが、60 年代のアメリカのタフガイを代表する性格俳優リー・マーヴィンを知っている人は少ないだろう。中学時代から映画館通いを始めた私ですら、『プロフェッショナル』（66 年）、『特攻大作戦』（67 年）、『太平洋の地獄』（68 年）等の彼の出演作のタイトルは知っていても、映画館で観ることはなかった。『ポイント・ブランク』（67 年）と題された本作も、そのタイトルは知っていたが、未鑑賞のままだ。

1924 年生まれで 1942 年に海兵隊に入った彼は、太平洋戦争で現実に日本軍と戦った経

験を持っているから、1951年に俳優デビューした彼には戦争映画が最適。それはその通りだが、それ以上に丹波哲郎とよく似た（？）、決してハンサムとは言えない彼の顔は、犯罪映画にピッタリと考えられたらいい。そのため、“1940年代から50年代にかけて量産された犯罪映画（フィルム・ノワール）の最高峰”と言われている本作には、リー・マーヴィンが主役で登場！

■なぜハード・ボイルドの最高傑作！と絶賛？■

本作のチラシには、「復讐に憑かれた男の激情と妄執が、歪んだ時空間の中に断片化されるハードボイルドの最高傑作」、「フィルム・ノワール、ヌーヴェルヴァーグ、サイケデリック・カルチャーが混然となった唯一無二の傑作」の見出しが躍っている。そして、次のとおり紹介されている。



なぜ本作はこんなに絶賛されているの？それはあなた自身の目でしっかりと！

■殺しの分け前はHow much？■

本作の原題は『Point Blank』だが、それだけでは意味がわからないため、邦題は『殺しの分け前』とされている。それは、本作が体を張って大金の強奪に成功した主人公ウォーカー（リー・マーヴィン）が、裏切られた仲間への復讐と、自分の分け前9万3千ドルの

取り戻しにひた走るという物語だからだ。

そこで興味深いのは、ウォーカーの殺しの分け前は **How much?** ということだが、それは何と 9 万 3 千ドル。私の子供時代の為替レートは 1 ドル 365 円の固定相場制だったが、1973 年 2/4 に変動相場制になった後は円安と円高を繰り返し、2025 年 7 月現在は概ね 1 ドル 145 円前後になっている。それで換算すると、9 万 3 千ドルは約 1500 万円だから、たった 9 万 3 千ドルの「殺しの分け前」を取り戻すために、主人公のウォーカーは命を張ってハードボイルドな復讐劇を展開していくわけだ。そう考えると、本作はかなりセコい話・・・？ 60 年代はその程度の（？）殺しの分け前を取り戻すために命を懸ける男がいたわけだ。

■□■「夢だ。これは夢だ！」から物語がスタート！■□■

本作のチラシには、「夢だ。これは夢だ。」の文字が躍っている。それは、本作の冒頭がそんなシーンで始まるからだ。

『アルカトラズからの脱出』(79 年)以降有名となり、『ザ・ロック』(96 年)でもロケ地として使われたアルカトラズ刑務所は今や「聖地」になっている。しかして、本作導入部でウォーカーの夢(悪夢)の中に登場するアルカトラズ刑務所を舞台とした某組織の取引と大金の強奪戦は、初めてロケが許可されたサンフランシスコ湾アルカトラズ島の刑務所(の廃墟)だから、それに注目！

「夢だ。これは夢だ。」と薄れゆく意識の中、ウォーカーの脳裏にさまざまな記憶が交錯する。さまざまな記憶とは・・・？

■□■復讐のターゲットはリースの他 3 人のボス！■□■

本作を含む 60 年代の名作はおおむね 90 分～100 分と短い。つまり、今時の冗長な説明は少なく、印象的なシーンの積み重ねで要領よくストーリーを理解させていくわけだ。

しかして、本作は夢(悪夢)から目を覚ましたウォーカーが、サンフランシスコ湾をめぐる遊覧船上で、ヨスト(キーナン・ウィン)と名乗る男から声をかけられ、ウォーカーの復讐すべき相手は、親友だったにもかかわらずウォーカーを裏切った憎き男マル・リース(ジョン・ヴァーノン)が組織に金を返し、今はウォーカーの妻リン(シャロン・アッカー)と豪勢な生活をしていると聞かされるところからスタートする。

原作では説明がいろいろあるのだろうが、映画では一切それを吹っ飛ばし、その後ウォーカーがいきなりリースと一緒に生活している妻のリンの家に押し入り、ベッドに向けてマグナムを激射するシークエンスになるので、それに注目！

リースはウォーカーの分け前 9 万 3 千ドルのほか、妻のリンも横取りしたのだから、よほど悪い男だ。ところが、「リースは 3 ヶ月前に出て行ったわ・・・居所はわからない」と話してくれたリンは寝室で睡眠薬を飲み自殺してしまったから、アレレ。

■□■まずリースを血祭りに！そのハードボイルドさに注目！■□■

説明を最小限に抑えた本作の展開は読みにくい。しかし、中盤ではリースがリンの妹ク

リス（アンジー・ディキンソン）と付き合っているとの情報を得たウォーカーが、クリスが経営しているクラブ「ムービーハウス」でさらなる情報を得た上、クリスの協力を取り付けるからすごい。なぜそんな展開になっていくのかは、ハッキリ言ってよくわからないままだが、ハードボイルド映画ではそこまで考える必要なし！要はそのハードボイルドぶりを楽しめばいいだけだ。

そう思っていると、リースがサンタモニカの高級アパート、ハントレーの最上階ペントハウスで、生活していると知ったウォーカーは、罠であることを承知の上で、クリスを「トロイの木馬」に仕立て上げることに。そして、ウォーカーはベッドの上でクリスと抱き合っているリースに対してマグナムを突き付け、「9万3千ドルを返せ」と要求。恐怖に震えるリースは、「金は組織にそっくり渡した。バックにいる組織の大物はフェアファックスとブルスター（キャロル・オコナー）、カーター（ロイド・ボックナー）だ」と吐いたが、結果的には、リースは裸同様の姿で屋上から転落死してしまうことに！なるほど、なるほど。

さあ、これによって今後のウォーカーのターゲットとなったフェアファックス、ブルスター、カーターに対する復讐劇の展開は如何に？

■□■意外な知能戦の展開に注目！3人のボスはカッコだけ？■□■

リースに対する復讐劇は、ウォーカーがリンをうまく使った「トロイの木馬戦術」が功を奏したが、本作では新たなターゲットになったフェアファックス、ブルスター、カーターという3人のボスに対する復讐劇でも、ウォーカーが見せる意外な知能戦に注目したい。逆に言えば、3人のボスはあまり頭が良いとは言えず、カッコだけということだ。

高級アパートの最上階ペントハウスに住んでいたリースはその豪勢さが際立っていたが、それ以上の大邸宅に住んでいるのがブルスター。ここはロサンゼルスを一望するプール付きの大邸宅だが、ヨストの情報では、次の標的ブルスターは翌朝この邸宅に戻ってくるらしい。

そんな大邸宅になぜウォーカーがやすやすと侵入できたかは大いに疑問だが、スクリーン上では、「これぞ、まさにハードボイルド！」のシークエンスが連続していくので、それに注目！ブルスターを退治した後に続く次の標的に対しても、ウォーカーの要求は一貫して「俺の金9万3千ドルを返せ！」だが、その目的達成までの道のりは、あなた自身の目でしっかりと。

2025（令和7）年7月23日記